

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：44523

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02635

研究課題名（和文）戦後日本の幼稚園カリキュラム成立史に関する実証研究 - 国立大学附属幼稚園を中心に -

研究課題名（英文）Empirical Research on the Development of Kindergarten Curricula in Japan since World War II: With a Focus on Kindergartens Attached to National Universities

研究代表者

小尾 麻希子 (OBI, Makiko)

武庫川女子大学短期大学部・幼児教育学科・准教授

研究者番号：30735022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後10年間に於ける神戸大附幼・徳島大附幼・お茶大附幼のカリキュラム開発過程とその特質を、当時に作成された実践資料に基づいて検討した。その結果、共通していたのは、(1)戦後初期には各園の戦前のカリキュラム・保育案を礎とした改革がなされ、(2)昭和20年代半ばには、発達研究や保育実践研究を基礎に、子どもの発達やもの見方・考え方に即した保育内容と指導のあり方が探究されたことである。各園の独自性は、(1)個人差に応じるカリキュラムづくり（神戸大附幼）、子どもの生活から見通した単元づくり（徳島大附幼）、日々の記録に基づく計画の改善（お茶大附幼）という点にあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本の幼稚園カリキュラムがいかに開発されてきたのかは、これまで十分に検討されてこなかった。本研究の意義は、当時に作成された実践資料の発掘と検討を通して、各幼稚園におけるカリキュラム開発の具体相とその特質を実証的に解明したことにある。この当時の幼稚園カリキュラムについては、従来、小学校のカリキュラムの考え方を適用したものという一つの見解が示されていた。本研究では、発達研究や保育実践研究を基礎に、子どもの興味に基づくカリキュラムづくりや、個人差に応じるカリキュラムづくり、実践記録の蓄積による計画の改善がなされていたことが明らかとなり、戦後日本の保育カリキュラム史における新たな知見を提示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the curriculum development process and characteristics of kindergartens affiliated with Kobe University, Tokushima University, and Ochanomizu University during the approximately 10 years after the war, based on research and practice records created at the time. As a result, the following things were common: (1) In the early postwar period, reforms were made based on the prewar curriculum and childcare plans of each nursery school, and (2) From the mid-1940s, developmental research and childcare practice research began. Based on this, the content of childcare and guidance that is in line with the child's development, perspective, and way of thinking were explored. The uniqueness of each nursery school is as follows: (1) Creating a curriculum according to individual differences (Kobe), (2) Creating units based on the perspective of children's lives (Tokushima), and (3) Improving educational plans based on daily records (Ochanomizu).

研究分野：幼児教育

キーワード：戦後幼稚園カリキュラム 神戸大学教育学部附属幼稚園 徳島大学学芸学部附属幼稚園 お茶の水女子大学附属幼稚園 発達研究 保育実践研究 保育実践記録

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の対象とする学校教育法制定から「幼稚園教育要領」(文部省,1956)刊行へと至る期間は、各幼稚園においてカリキュラム開発が盛んに行われ、幼稚園カリキュラムの基盤づくりがなされていった時期として着目できる。ただし、その時期に作成された幼稚園カリキュラムを取り上げ、検討した先行研究は極めて少ない。そこでは、小学校で盛んに開発されたコア・カリキュラムの考え方から影響を受けたという、当時の幼稚園カリキュラムに現わされた一つの動向(梅根,1950)その動向を、小学校カリキュラムの考え方を適用した幼稚園カリキュラムの創出と拡大として捉えた見解(神沢,1980)が示されている。

(2)梅根や神沢の著作において提示された見解は、取り上げたカリキュラムの構造や単元構成・単元内容に関して示されたものであり、カリキュラムが作成されるに至った研究過程やそこでどのような実践がなされたのか、実践の場に依拠した説明はなされていない。戦後日本の新しい保育の方向を指向したカリキュラムが、保育者達の手によっていかに開発され、実践課題に基づいていかに改革されていったのかは未だ説明されずに至っている。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、学校教育法制定から1956年版「幼稚園教育要領」刊行に至るまでの期間を対象とし、戦後10年間にわたる国立大学附属幼稚園における幼稚園カリキュラムの開発過程とその特質について、当時に作成された実践資料に基づいて明らかにすることにある。

(2)本研究において取り上げるのは、神戸大学教育学部附属幼稚園、徳島大学学芸学部附属幼稚園、お茶の水女子大学附属幼稚園の3つの国立大学附属幼稚園である。

3. 研究の方法

(1)前掲の3つの国立大学附属幼稚園において作成されたカリキュラムや研究記録、実践記録等の実践資料の発掘・収集・精査を行う。

(2)戦後初期に作成されたカリキュラムが、「幼稚園教育要領」刊行へと至る期間にいかに関係しているのかを実践資料に基づいて縦断的に検討する。

4. 研究成果

(1)戦後日本の進歩的幼稚園カリキュラムの先駆「明石附幼プラン」がいかなる研究と実践の上で開発されたのかを、その源流となる1930年代の明石女子師範学校附属幼稚園における「生活単位ノ保育カリキュラム」(昭和8年頃)の開発過程に遡って検討した。その結果は、次のとおりである。第1に、「生活単位ノ保育カリキュラム」は、1908(明治41)年以降の幾多に及ぶ保育科目の改編を軸に推進されてきた。その改革は、恩物に依拠した保育からの脱却に端を発し、「近郊利用」「園藝」などによる戸外活動を中心とした生活保育への転換、「劇化」を中心とした人文科・「近郊利用」「園藝」を中心とした自然科における生活単元保育の萌芽的实践、近郊利用・園藝・動物飼育・設備利用の各カリキュラムに基づく生活単元案の構築、及川平治主事の提示した郷土の人々の生活分析に基づく生活単元案の組織、という歴史を辿ってきた。第2に、「生活単位ノ保育カリキュラム」の開発へと至る研究は、及川の提示した教育測定学の研究を起点とし、各種の測定法や評価基準の整備とその実施、社会的場面において形成すべき望ましい習慣を、行動として具体的に観察・測定可能な形で表した保育案の研究、「子どもの事実」に基づく生活単元案の組織から個人差に応ずる遊びの研究に至るまでの「生活全体の指導課程」の編成、望ましき活動への変化としての知識・感情・習慣・態度を記した「生活単位ノ保育カリキュラム」の組織、という一連の手続きを採って推進されたことである。

(2)戦後日本の進歩的幼稚園カリキュラムの先駆として、兵庫師範学校女子部附属幼稚園において開発された「明石附幼プラン」(1948)の開発過程について検討した。その結果は、次のとおりである。第1に、「明石附幼プラン」は、コア・カリキュラムの考え方に学んだ幼稚園カリキュラムの先駆として注目されてきたが、本研究で検討したところ、同プランの単元と経験内容(「楽しい幼児の生活」)には、コア・カリキュラムから得た知見だけでなく、同園において開発された戦前の「生活単位ノ保育カリキュラム」及び昭和22年度の生活単元保育案を基礎としていたことである。同プランの歴史的意義は、コア・カリキュラムの考え方を援用したことに留まらず、戦前・終戦直後期の生活単元保育計画を基礎としつつ、生活単元保育計画から幼稚園生活全体の「総合計画」へと転換していくことを試みた先駆事例であったことにある。第2に、同プランの単元は、近郊での社会観察とその模倣遊び、自然観察・自然体験に基づく生活活動(飼育栽培活動)や製作遊び、季節的な遊びとその探究活動(遊び道具の製作や相談)、発達段階を考慮した集団遊びや協同遊び、時機を捉えた生活問題や年中行事、以上の過程に

おける表現活動（唱歌・遊戯・リズム）や談話・話し合い等の活動から成り立っており、わが国の伝統的な保育内容構成方法を礎としていたことである。なお、「明石附幼プラン」の単元内容構成については、同プランがコア・カリキュラムの構成法に立脚した幼稚園カリキュラムであることを前提に、社会機能別単元と年中行事・季節的なことを折衷したものと批判されてきたが、実際のプランでは、コア・カリキュラムの構成法によって「能力」を分析するという方法は採られなかった。

(3)戦後初期に作成された「明石附幼プラン」は、その後、神戸大学教育学部附属幼稚園・小学校・中学校の教育を対象とした「明石附属プラン」（1950）に位置づく幼稚園カリキュラムとして改訂されるに至った。その改訂から昭和27年度までの実践資料を検討した結果、明らかとなったのは、「自由遊び」を基盤とした保育を構築し、「自由遊び」の観察記録を基礎とした「子供の研究」を推し進めたこと、その研究活動上に作成された「個人差に応じるカリキュラム」（「個人課程」）と「明石附幼プラン」（「共通課程」）とが成り合うカリキュラム構成について考究されたことである。

(4)「保育要領 - 幼児教育の手びき -」（文部省,1948）刊行後の徳島大学学芸学部附属幼稚園において推進された研究活動について、同園で作成された保育の計画や実践的資料に基づいて検討した。その結果は、次のとおりである。第1に、幼児の生活経験に着眼した発達調査を出発点としたものであった。第2に、5歳児にとっての有効適切な生活経験を「のぞましい能力」として選定し、保育内容の精選化を図った。第3に、「のぞましい能力」を生活経験の範囲と発達の順序に沿って組織した「5才児の能力表」を作成し、系統的・組織的な保育内容の構築を実現したものであった。第4に、この研究活動上に作成された単元「幼稚園の新しいおうち」の計画には、新園舎の建築という幼児を取り巻く環境と生活に基づいて、「のぞましい能力」を組織的・系統的に経験させていこうとする意図があったことである。なお、この能力表の作成の背景には、「小学校学習指導要領国語科編（試案）」（1951）に「国語能力表」が掲載されるなど、子どもの日常生活に目を向け、その生活に必要な能力を育むという戦後日本の教育課程に対する考え方が存在していた。

(5)お茶の水女子大学附属幼稚園の教育計画研究と実践の特質について、同園の教師と同大学教授津守真との共同研究によって出版された『幼児の教育内容とその指導』（1955）及びその改訂版『改訂 幼児の教育内容とその指導 - 教育計画の実践 -』（1957）に基づいて検討した。その結果は次のとおりである。第1に、発達研究を基礎に、幼児期の発達の特性に即した指導方法を究明することを教育内容研究の出発点とした。第2に、「子どもを理解する」ことを教育計画の極めて重要な部分とした。第3に、実践記録に基づいて、幼児一人一人の興味や要求、発達の状況への理解を深め、「実践記録を積む」ことを教育計画と実践の基礎とした。第4に、教育計画と実践の向上へと向かう保育研究の方法を実践的・実証的に提示したことである。なお、この同園の研究では、幼児の活動や経験の中から幼児一人一人の育ちへとつながる芽を見つけ出し、それを育てていくことを基礎としていた。また、当時の保育界の課題となっていた保育理論と保育実践との結びつきを実現するだけでなく、その実践的研究の方途を提示した画期的な取組であった。以上の教育計画研究の歴史的意義は、次の2点にまとめられる。第1に、保育内容とは幼児の遊びをよく観察し、伸びゆくところを見極め、その次の活動・経験に対する洞察をもちながら立案していくという「誘導保育」の趣旨を、発達研究を基礎とした戦後の教育計画・実践へと深化させた。第2に、教育計画と保育実践の好循環を促すことを試みた保育研究の先駆であったことである。

(6)本研究のまとめとして、神戸大学教育学部附属幼稚園・徳島大学学芸学部附属幼稚園・お茶の水女子大学附属幼稚園における戦後保育カリキュラムの具体相について縦断的に検討した。その結果は次のとおりである。3つの幼稚園に通底していたのは、第1に、戦後初期には、各幼稚園の戦前のカリキュラム・保育案を礎に、子どもの興味や要求から出発する保育内容を構築していこうとする改革がなされたことである。この時期のカリキュラムにみる保育内容は主として、近隣の社会環境・自然環境における観察・体験とその模倣遊び、季節的な遊びとその中での探究活動、発達段階を考慮した集団遊びや協同遊び、時機を捉えた生活活動や年中行事、以上の過程における表現活動（唱歌・遊戯・リズム）や談話・話し合い等の活動から構成されたものであり、わが国の伝統的な保育内容構成方法が採られていた。保育者達は、こうした戦前からわが国の保育に根差してきた保育内容構成の考え方を基礎に、子どもの興味を重んじた「保育要領」の趣旨を反映させ、戦後保育へと向かう幼稚園カリキュラムを作成していこうとした。第2に、昭和20年代半ばには、カリキュラムづくりの基礎に発達研究や保育実践研究を据え、眼の前にいる子どもの発達やものの見方・考え方に即した保育内容と指導のあり方が探究されていったことである。他方、各幼稚園のカリキュラム開発過程の独自性は、特に、個人差に応じたカリキュラムづくり（神戸大附幼）、眼の前の子どもの生活から見通した単元づくり（徳島大附幼）、日々の記録に基づく「教育計画」の改善と、計画と実践の好循環（お茶大附幼）という点にあった。

(7)戦後日本の幼稚園カリキュラムがいかに開発されてきたのかは、これまで十分に検討されてこなかった。本研究の意義は、当時に作成された実践資料の発掘と精査を通して、各幼稚園におけるカリキュラム開発の具体相とその特質を実証的に解明したことにある。この当時の幼稚園カリキュラムについては、これまで、小学校のカリキュラムの考え方を適用したものという特徴的な一つの見解が示されていた。一方、本研究では、発達研究や保育実践研究を基礎に、子どもの興味や個性等に基づくカリキュラムづくりや、個人差に応じたカリキュラムづくり、保育実践記録の蓄積による計画の改善がなされていたことを解明し、戦後日本の保育カリキュラム史における新たな知見を提示した。

引用文献

- 梅根悟(1950)幼稚園のカリキュラム、東京大学教育学研究室(編)、教育大学講座第九巻 幼稚園教育、金子書房、127-204.
- 神沢良輔(1980)保育の状況、岡田正章・久保いと・坂元彦太郎(編)、戦後保育史第一巻、フレーベル館、48-51.
- 小尾麻希子(2022)1930年代の明石女子師範学校附属幼稚園における「生活単位ノ保育カリキュラム」開発過程 - 「明石附属幼稚園プラン」の源流を探る - 、国際幼児教育研究 29、57-72.
- 小尾麻希子(2023)戦後初期の兵庫師範学校女子部附属幼稚園における保育カリキュラム改革 - 昭和23年発表「明石附幼プラン」の検討を中心に - 、保育文化研究 17、129-143.
- 小尾麻希子(2024)戦後初期の「明石附幼プラン」改革過程における保育者の専門的力量形成 - 自由遊びの研究に着目して - 、日本保育学会第77回大会研究発表抄録、日本保育学会、K-B-1-04.
- 小尾麻希子(2021)「保育要領」刊行後の徳島大学学芸学部附属幼稚園において推進された究活動 - 単元「幼稚園の新しいおうち」の計画作成に至るまでを中心に - 、保育学研究 59(1)、7-20.
- 小尾麻希子(2021)1950年代のお茶の水女子大学附属幼稚園において推進された教育計画研究の特質とその歴史的意義、国際幼児教育研究 28、51-66.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 小尾麻希子	4. 巻 29
2. 論文標題 1930年代の明石女子師範学校附属幼稚園における「生活単位ノ保育カリキュラム」開発過程 - 「明石附属幼稚園プラン」の源流を探る -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際幼児教育研究	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34567/iaece.29.0_57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小尾麻希子	4. 巻 59(1)
2. 論文標題 10.研究発表「保育要領」刊行後の徳島大学学芸学部附属幼稚園において推進された研究活動 - 単元「幼稚園の新しいおうち」の計画作成に至るまでを中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 7-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.59.1_7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小尾麻希子	4. 巻 28
2. 論文標題 1950年代のお茶の水女子大学附属幼稚園において推進された教育計画研究の特質とその歴史的意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際幼児教育学研究	6. 最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34567/iaece.28.0_051	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小尾麻希子	4. 巻 15
2. 論文標題 戦後教育改革期IFELの示唆した幼稚園カリキュラム開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究論集	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小尾麻希子	4. 巻 65
2. 論文標題 戦後日本の幼稚園カリキュラムに関する研究の動向 - 日本保育学会年次大会における研究発表を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 393-398
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小尾麻希子	4. 巻 17
2. 論文標題 戦後初期の兵庫師範学校女子部附属幼稚園における保育カリキュラム改革 - 昭和23年7月発表「明石附幼プラン」の検討を中心に -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保育文化研究	6. 最初と最後の頁 129-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小尾麻希子
2. 発表標題 1940年代の明石女子師範学校附属幼稚園における保育カリキュラム改革 - 「明石附属幼稚園プラン」の礎を探る -
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小尾麻希子
2. 発表標題 兵庫師範学校女子部附属幼稚園における戦後保育カリキュラムの開発過程
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小尾麻希子
2. 発表標題 1950年代のお茶の水女子大学附属幼稚園における保育計画と保育実践 - 『幼児の教育』誌の検討を中心に -
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小尾麻希子
2. 発表標題 戦後教育改革期IFELの示唆した幼稚園カリキュラム開発 - 幼稚園教育班・幼年教育班講習内容の検討を中心に -
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小尾麻希子
2. 発表標題 戦後日本の幼稚園カリキュラム成立史に関する研究 - 「望ましい経験」の選定を中心に -
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------